

〈修士論文要旨〉

東大寺鎌倉復興における別所とその造形

卷 田 崇 裕

本論では別所の構成要素が持つ機能と背景を多角的に探ること、重源らが目指した別所の姿に迫り、この空前の大事業を支えた別所の造形が、当該時代においてどのような役割を担ったのかを明らかにするとともに、別所やそれを取り巻く拠点群の内容から、復興事業を進めた重源の構想についても改めて考えていきたい。ここでは特に「南無阿弥陀仏作善集」(以下「作善集」)に記述される別所の内容の異同について、重源の地方経営の観点から考察を行い、その説明を試みる。また、復興期の活動には在地の神仏との結びつきがまみられるが、私は諸信仰を取り込んだ、いわば信仰のネットワークがこの復興事業を一層推進していたのではないかと考えている。こうした信仰のネットワークの鍵と成り得るものとして、太子信仰を挙げ、その可能性を探ってみたい。

第一章では地方経営と別所の在り方を中心に考察しており、第二章では復興期の重源の信仰と作善を形作った、大勧進職補任以前の重源の歩みを振り返った。そして、第三章では第一章と第二章での考察を引き継ぎつつ、畿内を中心とした別所や拠点に触れながら、太子信仰が重源の祖師信仰をはじめとした諸信仰を結びつける内容を備えてお

り、東大寺復興にあたって、その活用が大きな意味を持っていたことを明らかにしようと試みた。

「作善集」の記述をみると、特に備前・備中では別所の内容の記述が極端に少なく、社寺の修造が多く目に付き、逆に、播磨では別所の内容は充実しているものの、別所以外の活動はほとんど窺えない。こうした別所間における差が、どのようにして生じたのかという疑問が第一章での考察の前提であった。まず、東大寺復興という事業の質や規模を考えると、「作善集」において別所という名称を附されていないことも、様々な形で復興活動に貢献した、別所に準じるような拠点はより多く存在したと想像され、その例として、ここでは周防の柚での現場拠点をとりあげた。さらに、周防の場合にはこうした現場拠点が別所と並行、あるいは先行して設けられたとみられ、これらが地方経営の中核となった別所を補完する最前線の基地であり、その地方基盤となっていたと考え、別所に準じる拠点群の活動を踏まえた考察の重要性を指摘した。また、備前では多くの寺社の修造に携わった事が記されているが、この修造についても単なる宗教的な作善にとどまらず、国務の進捗や東大寺復興のための資材輸送ルート整備の一環として、

その有効活用を期しての活動であったとみて、これらの寺社の修造が、別所に準ずる拠点の整備にあたりと位置づけている。

様々な利害が交錯する地方において円滑に事業を推進するために、別所をはじめとした拠点において、①風呂の施行など現実的な功德を人々に実感させる利生面の工夫を凝らし、明解で行い易い念仏を用いた阿弥陀信仰をはじめ、建築や仏像などの造形物に（積極的に新しいものを採り入れることで）人々の関心を集め、信仰を流布させること。②在地に根を張った既成の信仰を認め、修造などで援助するとともにその協力を仰ぎ、既成の諸信仰と一体となって進むこと。③広く公共の利益となる事業の推進を通して人心の収攬を図ること。などが事業推進の方向として存在したと思われる。重源の地方経営では上記のいずれかが欠けることはなかったと思われるが、地方によって臨機応変に、最も効果的と思われる手段に重点をおいて、拠点経営や事業を推進していったのではなからうか。備前や備中では、別所や中核となる拠点が既存の社寺に寄り添う形で設けられており、備前の船坂峠の整備事業など、ここでの地方経営は②、③の点に重点がおかれ、一刻も早い領国経営と事業推進のため、在地の信仰と一体となって事業を推進していった側面が強かったように思われる。対して、①の好例は播磨別所にみられ、本尊である阿弥陀三尊像や浄土堂における宋代図像や大仏様などの新要素の摂取は、新たな信仰の拠点である別所に入々の関心を集めるための工夫とも捉えられるだろう。また、重源は備前で「二十二所」もの修造を果たしたが、播磨では大部荘内に九

つあった古寺の修造を拒み、その古仏を別所に安置した。これは大部荘の莊園経営と地域信仰の核として播磨別所の整備を急ぎ、荒廃した古寺の古仏を安置することで、既存の社寺に向けられる信仰心を別所に取り込もうという意図からきた処置とみられる。ここでは国を挙げて広範に展開した備前や備中での復興関連事業に対して、播磨での事業は大部荘の安定経営に期するところが多いという事情が、古寺修造の態度を分けていたのではないだろうか。「作善集」におけるこうした別所間の内容の相違や差は、地方での事業展開の方向性や在地の信仰状況など、拠点が置かれた場や環境を重視してその構想が進められたことを反映しているように思われる。また、重源の地方経営においては、在地に既存の諸信仰を否定せず、むしろそれと協力関係を築くことで円滑な事業推進を目指していたようである。在地の人々にとっても争乱や大地震、飢饉などによって目の当たりにした世の衰えと社会不安を振り払うため、東大寺の復興は望まれたはずであり、そこに東大寺復興を掲げた信仰の結果が生み出される要因があったのではないだろうか。

重源が崇敬した人々（祖師）については、「作善集」にみえる快慶作の厨子佛に描かれた行基菩薩・弘法大師・聖徳太子・鑑真和尚に端的に示されていると思われるが、ここで興味深い事は、「聖徳太子伝暦」等によって太子信仰が流布された結果、当時においては上述のような重源の祖師達は、聖徳太子の後身、あるいは太子の目指した仏教弘通を実践した人物として、太子と非常に密接な関係を持って認識さ

れていたとみられることである。東大寺の本願、聖武天皇も例外ではなく、聖徳太子の後身とみられることは重要であろう。

このような太子観は、重源と同時代に生きた人々に共通するものであったとみられるが、重源の太子観とその信仰の形成には、彼が出家した醍醐寺がその鍵となっていたのかもしれない。重源は源運を師とし、金剛王院流の法脈に連なるとされるが、この金剛王院流の始祖、聖賢（賢仁）には、太子に対する往生の仲介者としての認識と、念仏による阿弥陀信仰が存在したことが窺え、醍醐寺において太子を紹介した浄土（阿弥陀）信仰が重源に芽生えていた可能性も少なくないように思われる。醍醐寺開山の聖宝も太子の後身とされていることは見逃せないだろう。

重源は各地に拠点を設ける際に、その地域の信仰状況を重視したとみられるが、太子信仰の中心地、四天王寺の外港である渡辺津にあつた渡辺別所は、信仰面においてもこの寺を大きく意識していたと考えられる。また、重源が生きた平安末から鎌倉期の四天王寺を考える上で注目されるのは、この時期には高野山、四天王寺、善光寺を結ぶ勸進聖の交流ルートが確立していたとみられることであり、重源にも当然こうした認識があつたと思われる。私はこうした交流ルートに着目して東大寺復興（勸進）事業への活用を目論み、より一層の発展を目指したのが重源の復興事業の一つの道筋だったのでないかと考えているが、上述の交流ルートは他ならぬ太子信仰を通してその関係が結びつけられていたのであり、太子を介した寺院の結びつきを主張し、

活用していくことは重源自身の信仰にも適っていたとみられる。当時、貴顕が四天王寺に篤い信仰を寄せていたことも重源がこの寺に注目する大きな要因となつたであろう。

『作善集』には磯長太子廟に快慶建立の御堂があつたことが記されるが、これは重源と快慶の太子信仰の具体例といえよう。東大寺復興期にはこの太子廟が暴かれ、太子の齒が盗まれるという事件が起こっているが、この事件の始末が他ならぬ重源の裁量でつけられていることは注目される。これは当時、四天王寺のみならず、太子廟にも重源の影響力が及んでいたことを示しているとみられ、ここからは太子信仰（を介した諸信仰）の中心的な推進者、いわば元締めの一人としての重源の姿が垣間見られるように思われる。このような事件の背後には重源の関与が想定され、祖師に有縁の舍利を、東大寺復興推進の起爆剤とする意図があつたと考えられる。太子信仰に連なるとみられる造形は東大寺別所食堂の救世観音など、別所や拠点でも窺うことができたが、ここでの舍利は、祖師や仏の靈性を象徴する役割を果たしていたとみられ、大仏をはじめとする仏の靈験の源ともなっている。重源が鎌倉復興の東大寺に宋の新要素を取り入れたことは、一度は兵火に焼かれ、靈験と宗教的權威を失つたこの寺に伝統を復興し、さらに新来の要素を加えることで、新たな靈験と權威を加えようとした試みであつたように思われる。そこでは伝統と新しさの共存にこそ、その真の価値と意義が見出されるべきではないだろうか。そしてまた、重源が目指していたのは、東大寺に聖徳太子の寺としての位置づけを積

極的に加えることで、その靈性の根源に太子とそれに連なる諸信仰を据え、当時盛行をみせていた諸信仰を牽引するにあさわしい、「我が朝第一の伽藍、異域無類の精舎（『玉葉』）」としてもう一度新生させることになったと考えたい。重源の祖師達を包み込む、大きな包容力を持った聖徳太子（信仰）は、復興すべき大仏と同じように、宗派信条を越えた存在であり、まさに復興事業推進の切り札と成り得るものだったといえるのではないだろうか。また、重源が設けた拠点群は、その信仰の中継地としての役割があったように思われる。